

令和4年度 学校自己評価表

鳥取県立倉吉農業高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切にして知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。	今年度の 重点目標	1 基礎・基本の定着と学力の向上 2 基本的生活習慣の確立 3 地域連携と特色ある教育活動 4 進路意識の向上と進路保障 5 コミュニケーション能力の向上
-------------------	---	--------------	---

年度当初					
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策
1	基礎・基本の定着と学力の向上	基礎学力の定着	前年度基礎力診断テスト結果 ・1年間の学習の取組でD3は減少、特に2年生が大幅に減少している。 ※D3:筆記試験を課す企業で不合格が多い。 ・2年生上位層は大学一般入試で合格が目指せるB3以上2名。(4月から変化なし) ・B3生徒のうちB2以上の学力をつけ、中位層から上位層へ向上した生徒が数名いる。	・基礎力診断テスト結果におけるD3の割合が、 1年生は、4月数値から10％減少、 2年生は、4月数値から20％減少している。	・One week 問題集や朝学習の時間を活用して基礎学力の定着を図る。 ・朝学習・基礎学力テストの内容を検証し、実施方法等の改善に努める。 ・診断結果を用いた分析を国語、数学、英語各教科会で実施する。
		授業改革の取組の推進	・各教科・科目で公開授業が実施され、協同学習の授業実践・授業研究は進んでいる。協同学習の手法による授業改革が徐々に実践されつつある。 ・ICTの全体の研修会を2回実施した。また、週1回、希望者を対象にした研修会を行い、グーグルアプリを活用できる教員が増えた。 ・R4年度入学生の教科の新しい3つの観点別評価について、昨年度までに本校の評価基準等を協議し、方向性を出した。	・全ての教科・科目で協同学習の理論を取入れた分かりやすい授業を実践している。 ・生徒が積極的にICTを活用し、生徒の学習意欲と学力が向上する。 ・各教科ごとの評価表をもとに観点別評価を行い、生徒の学力向上につなげる。	・協同学習をテーマとした公開授業を全員が行うために研修会を実施する。 ・誰もがICTを活用した授業を実践するために、ICT研修を学期に1回実施し指導力の向上をはかる。1年生のChromebook授業活用が積極的に行われるようにICT活用推進委員会で計画し実践する。 ・教科間の連携を強化し、より良い評価方法を模索していく。
2	基本的生活習慣の確立	挨拶指導の徹底と服装規定を守る取組の推進	・分離礼がかなり浸透してきた。 ・8割強の生徒が服装規定を守っている。2割の生徒は毎月の服装検査後に改善できている。	・全員が常に分離礼による挨拶ができる。 ・常に服装規定を守り、安定感のある生活態度で過ごしている。服装改善の保護者への文書を10％にする。	・授業、清掃、農場当番、部活動等あらゆる場面で分離礼を徹底する。 ・毎月の服装検査の実施と事後指導を徹底し、担任、学年団、学科、生徒指導部の連携を密にし、段階的・組織的指導を行う。
		寮教育の充実	・日課に自習時間を設けているが、目に見えた成績の向上に実感が持てず、学習に対して自信を持ってない生徒がいる。 ・年間3回寮講演会をもち、コミュニケーション力の向上、農業及び関係業種への進路実現、救急救命法について学んでいる。 ・寮生サミットでは、他府県の農業経営者育成高校の寮生同士が、各校の紹介ならびに寮の現状と課題を話し合い交流を図っている。令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大のため中止、令和3年度はリモート開催となり、十分な成果が上がっていない。	・基礎学力テストの成績が毎回65点以上になることをきっかけに、日頃の学習や進路実現に意欲的に取り組んでいる。 ・講演会後のアンケートで、内容の理解および満足度を3以上（5段階評価）と感じている生徒が60％いる。 ・他校を訪問し、対面での交流および寮見学を再開する。	・基礎学力テストの範囲に合わせた課題に繰り返し取り組ませる。得点が伸び悩む生徒に対しては、課題プリントを追加し指導ならびに助言を加える。 ・講演の中に協同学習の要素を取り入れたり、体験することで理解が深まるよう、講師に依頼する。 ・新型コロナウイルス感染状況に応じた実施方法を、関係各校と協議する。
		人生を考える	・人権学習を通じて知り得たことを自分のこととして考え、発言する生徒が少ないように見受けられる。 ・人権学習LHRでの話し合いを通じて自分の考えを互いに伝えあっているが、まだ改善の余地がある。	・自分は社会の一員であって、その社会をより良いものにしていくことで、自分の人生も充実させることができることを認識し、自覚する。 ・互いに自分の考えを伝えあい、認めあうことで、コミュニケーションの大切さを学び、より良い社会をつくるのに必要な基本的な態度を身につける。	・「人生を考える講演会」や「性に関する講演会」などを企画することで、人権問題を通して社会と自分との関わりについて一人ひとりが考え、感想を述べる機会を提供する。 ・人権LHRにおいては身近で自分事として考えられるテーマを設定し、クロームブックを活用するなどして、自分の意見を互いに伝えあうことができるよう授業の展開を工夫する。
		教育相談・特別支援教育担当を中心とした組織的取組の推進	・自己理解・他者理解の意識が進んでいない生徒は、友人との関係の持ち方に困惑しやすい傾向がある。 ・QUの結果において、非承認群・不満足群・要支援群に分類される領域に学校生活に対する意欲の低い生徒が見られる。	・自己理解・他者理解が進み、より良い人間関係作りができるようになり、生徒アンケートの「私のクラスは自分にとって過ごしやすい場所である。」の割合が7月に比べ12月が上昇している。 ・QUの結果において、生徒の学校生活意欲平均得点が第1回目検査より第2回目検査が向上している。	・新入生全員面談と2・3年生の面談、職員による生徒観察をととして、生徒の実態把握をし、より実態に即した学習支援・生活支援をする。 ・校内職員研修会を実施し、QU等を活用した教師の生徒対応のスキルをアップさせる。

年度当初				
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策
3	地域連携 と特色ある教育活動	各科の魅力づくり	・地域に定着した取組を継続しながらも時代のニーズにマッチングした特色ある取組やSDGsの理念に基づいた学習活動を実践している。 ・調査・分析を中心として、より科学性を高め、地域農業への貢献を視野に入れたプロジェクトに取り組んでいる。	・各科の特性に基づいた課題研究を推進し特色ある取組を地域振興につなげる。 ・地域貢献に加えて環境問題などグローバルな視点を持った課題研究を実践する。 ・SDGsに関する生徒及び教職員の知識と理解を推進するために研修会をもつ。
		地域との連携・発信	・積極的に地域と連携し、その取組が地域のニーズに応えるものであるとともに、生徒の学びが深まり自己肯定感や進路意識の醸成につながっている。 ・教育活動を積極的に本校公式SNSで発信するとともに、一般に対しては報道機関に資料提供することで地域に本校の理解が進んでいる。 ・中学生一日体験入学の開催を2日間に戻し、県内外からの参加者が150名を超え、3つの学科の主な学習内容を体験することにより、中学生、保護者、中学校教員の本校理解が進んでいる。	・科学的裏付けのあるプロジェクトを進めていくために、関係機関（大学、農業大学校、農業試験場、産業技術センターなど）との連携を一層進める。 ・ホームページの投稿の仕方、報道機関への資料提供の方法について周知する。 ・中学生一日体験入学の参加者を増やすために、日程が他校と重ならないようにするとともに、各学科の魅力ある取組をSNS等を利用して県内外に発信し、中学生および保護者の興味・関心を引きつける。
		資格取得の推進	・FFJ級位検定の合格者は、初級位62名（合格率53％）、中級位23名（同26％）で昨年実績を上回った。 ・各種資格検定の合格者数延人数は278名で、昨年の263名を上回った。 ・最難関であるアグリマイスタープラチナの認定者が2名あった。	・FFJ検定の意義や学習方法等の説明をとおして生徒のモチベーションを高める努力を続け、普通科教員も含め教員が一丸となり指導する。 ・資格・検定の情報を積極的に案内することで受検者を増やし、資格取得の有利性を説明し主体的に学習させる。 ・農業技術検定問題集やテキストを活用して出題傾向を分析・把握し指導する。
		学校からの情報発信の推進とPTA活動の活性化	・青バパイヤやお米甲子園などの成果がマスコミに多数取り上げられ、生徒の達成感や自己肯定感につながっている。 ・各分掌へはホームページ(HP)への掲載を呼びかけているが、掲載方法が十分に伝わっているとは言い難い。 ・PTA活動への参加者は、各行事、研修会等への参加者数の推移から考えると一定数ある。	・特色ある取組をHPやSNSに投稿する。また、マスコミへ情報提供し地域へ積極的に発信する。 ・年間60回以上のHP掲載を目標に取組み、実習や部活動の様子を担当者や部顧問がHPにアップするよう働きかける。 ・保護者への情報伝達手段として「まちcomiメール」を活用する。
		教育活動に必要な人的・物的・地域資源の有効活用	・独自事業・その他事業に関する講師の報償費、特別旅費等を適正に執行し、教育活動を支援している。	・各種事業等の計画段階から教職員と連携し、地域、保護者、関係機関等を教職員へつなげる役割を果たす。 ・地域の人材等の情報提供を行う。
4	進路意識の向上と進路保障	インターンシップの推進	・2年生インターンシップはコロナ禍のため2年連続で中止した。 ・スーパー農林水産業士育成カリキュラムとしての長期インターンシップは、万全の新型コロナ感染防止対策を取った上で、2・3年生延10名が畜産農家、園芸農家、森林組合等で実施した。	・9月に2年生インターンシップを実施し、就労意欲の向上や進路選択の大きな一助につながっている。 ・長期インターンシップに参加する生徒が10名を超え、より実践的な農業体験を経験することにより、農業後継者としての意識や態度が身に付いている。
		農業後継者の育成	・スーパー農林水産業士の5期生5名が認定され、2年生5名が来年度の認定を目指している。 ・スーパー農林水産業士認定者のうち、5年連続で鳥取大学、2年連続で公立鳥取環境大学へ進学した。 ・農業関連の進学・就職割合（42.2％、35名/83名）が増加した。（R2：38.6％、32名/83名）	・スーパー農林水産業士育成プログラムに則ったカリキュラムを確実に実施し、就農意欲喚起に関わる行事に積極的に参加させる。 ・4年生大学への進学希望者の基礎学力を高める取組を継続し、特にプロジェクト研究に重点をおいて主体的に取り組ませる。
		進学希望者への支援	・3年生で農業系大学進学を希望する生徒2名を含む進学希望者が約20名おり(2年時10月調査)、大学進学研修プログラムの参加案内や個別指導を開始している。 ・2年生で農業系大学進学を希望する生徒2名を含む進学希望者が約30名おり(2年時10月調査)、今後個別指導を行っていく。 ・1年生の4月調査は実施済。	・進学希望者に対する個別指導を継続させる。 ・年度初め(4月)に実施した希望調査を基に生徒の進路希望を把握し、早期に個別の指導体制を構築する。 ・進路指導部、学年団、各専門教科担当が連携を密にし学校全体で生徒の指導にあたる。
5	コミュニケーション能力の向上	異世代との交流推進	・学校開放講座、田んぼの学校等はコロナ禍で中止としたが、保育園、中学生との花育交流や西中学校農業体験学習、あぐりキッズスクール等は、生徒が習得した知識・技術をもとに主体的に指導できた。 ・昨年に引き続き生産物販売実習（のこう市場、北谷販売、駅パル、学園祭生産物販売）は感染症対策を施して開催した。それぞれ多くの来客で賑わい、学校理解と地域貢献につながった。	・本校で身につけた高度な技術・知識を異世代と交流し、指導することによって自己肯定感や自信につながっている。 ・交流事業の企画、運営などを生徒が主体となって取り組むことができ、コミュニケーション能力がさらに高まっている。
		学校施設の開放	・地域に学校施設を開放し、本校で取り組んでいる農業教育を地域住民に体験してもらうことは、本校理解を進めるだけでなく、生徒にとって日頃の学びの意義を確認し、自己肯定につながる重要な意義を持っているが、昨年はコロナ禍のため本事業は中止した。 ・各科とも定員割れが続いている状況であり、中学校の先生方に本校の学習内容を知っていただく必要がある。	・3学科を代表する実習（乗馬教室、食品加工、木材加工、フラワーアレンジメント）に参加する地域住民の数が延50人を超えている。 ・地域に本校の学びの理解が進み、指導にあたる生徒にとって学習意義の確認や自己肯定につながり、コミュニケーション能力が向上している。 ・中学校の先生方の本校の学習内容の理解が進み、進路指導に活かされ志願者数が前年より増えている。
		生徒会活動と部活動の活性化	・生徒会活動は、執行部、農業クラブを中心に自主性が育ち始めているが、生徒会活動に無関心な生徒も見受けられる。 ・年間を通して活動している部活動が限られている。	・生徒会執行部の積極的な活動を通して、全校生徒が生徒会活動の意義を認識し、生徒会活動に積極的に参加できる。 ・中国大会と同程度の大会に出場する部が、文化系、体育系、農業クラブを合わせて4部以上となる。

A〔十分達成〕100～90 B〔概ね達成〕89～70 C〔変化の兆し〕69～50 D〔まだ不十分〕49～30 E〔目標方策の見直し〕29～